

ハンディクラフトからみるインドのチベット人社会

—カルナータカ州バイラクッペ・コロニー報告—

杉本 星子¹⁾

はじめに

近年、人類学では「もの」に注目した研究方法が見直されている。従来の「もの」研究は、「もの」の形態や製造技術、使用法の比較研究、あるいは分布や歴史的变化をあつかう物質文化研究であった。これに対して最近では「もの」の製造・流通・消費のプロセスに注目し、「もの」に付与される社会・文化的価値とそれを生み出すメカニズムに焦点を当てる研究が増えている (e.g. Appadurai 1986)。インドにおける「もの」研究は、大きく民族誌の一端としての生活道具研究と、美術史や哲学と結びついたハンディクラフト研究に分けられる。インドのハンディクラフト研究は、クマラスワミやカラデヴィ以来マルタン・シンに至る長い伝統をもつ (e.g. Singh 2000)。それらの研究は、ハンディクラフトという「もの」の美的価値とそれをつくる職人の技術に注目してきたが、しかし流通や消費、そして価値付けという側面は扱ってこなかった。また多くの場合、研究対象はヒンドゥー教やイスラーム教を背景としたいわゆる「インド文明」の産物であり、チベット人のハンディクラフトはそこから除外されてきた。インドの「もの」研究もまた再考の時期にきているといえよう。

本研究はハンディクラフトという「もの」を切り口に短期のフィールドワークをおこなうことによって、「もの」をとおした社会人類学的研究の新たな可能性を探りつつ、インドのチベット難民社会の現状を考察することを目的としている。調査地は、インド南部カルナータカ州バンガロール地方のチベット難民コロニー、バイラクッペである。フィールドワークは2001

年9月に実施された。

1. バイラクッペのチベタン・コロニー

1959年、ダライラマは中国のチベット侵攻から逃れ、インドのダラムサラに亡命政権を樹立した。インド政府はダライラマとともに亡命したチベット難民を受け入れ、彼らに土地を貸与してキャンプの設立を許可した。現在インド全土に24のチベタン・コロニーがある。そのうちカルナータカ州には、バイラクッペ (Bylakuppe : 2 colony, 20 camps)、チャウキー (Chowkuy : 2 camps)、フルプタ (Gurputa : 15 camps)、オディヤルパルヤ (Odeyarpalya : 15 camps)、ムンドウゴドゥ (Mundgod : 9 camps) の6つのコロニーがある。またインド各地の大都市にも多くのチベット人が住んでいる。デリー郊外には、チベット仏教寺院を中心にチベット人が集まって住む居住区のようなものも形成されている (Mukerji 1983: 3-6)。

バイラクッペはカルナータカ州の州庁所在地バンガロールから約200キロ西、マイソールから約70キロ、バスが通う町クシャルナガルから5キロのところに位置する。インドのチベタン・コロニーは、ダライラマを中心とした行政組織によって統治されている。それぞれのコロニーには、政府から派遣された代表を中心に行政、福祉、教育、そして生計維持のためのさまざまな協同組合が組織されている。難民コロニーには、国連やEU、国際的な難民支援組織の援助も入っている。チベット難民のあいだの社会的なネットワークは緊密であり、それをとおした相互扶助関係によって医療や行政手続、その他の生活上のさまざまな問題で困難に直面した難民に援助の手が差しのべられている。

1) 京都文教大学教授

バイラクッペのコロニーは1959年に設立された。インドにおけるチベット難民社会の中心はいうまでもなくダライラマのいるダラムサラである。しかし、カルナータカのチベット人たちは、ダラムサラは観光開発と政治的駆け引きに毒され本来のチベットの姿を失っているし、デリーのチベット人の多くはビジネスに従事し、すっかり町の人になってしまったという。彼らは、バイラクッペのチベタン・コロニーの長閑な生活のなかにこそ、農業を基盤とした本来のチベット社会の姿とその文化が維持されているのだという誇りをもっている。

バイラクッペ・コロニー設立当初の難民人口は3000人であった。カルナータカ政府は難民一人あたり1エーカー、総計3000エーカーの土地をチベット政府に貸与した。現在の人口は約1万である。バイラクッペはオールド・キャンプとニュー・キャンプの二つからなり、二つの代表組織がある。南インドのチベット人コミュニティの中で最も大きいということもあり、小学校から高校までのチベット人学校、孤児院、養老院などもある。難民キャンプの土地面積が限られているため、新たな難民の流入は土地不足をうながすことになる。また人びとは中国政府のスパイが紛れ込んで来ることを大変怖れている。そのため新しい難民の到着は、あまり歓迎されていないのが実状である。

バイラクッペは乾燥した草原地帯にあり、開墾地の一角は、ほぼ一面トウモロコシ畑である。キャンプのまわりはまだ深いジャングルに覆われ、象をはじめさまざまな野生動物が住む。そのため住民たちは土地の開墾を進める一方で、こうした動物の被害から農作物を守る努力をしなくてはならない。バイラクッペのチベット人の生計基盤はトウモロコシ栽培であるが、ほかにラギやタバコ、チリ、ジンジャーなどをつくっている。また牛を飼い、協同組合をとおして搾乳したミルクを販売している。隣接するコダグ県はコーヒーの産地である。キャンプにコーヒーの加工場を設け、コーヒーを製品化するビジネスに成功した難民がいる。この工場ができてから、バイラクッペの人びともコー

ヒーを栽培するようになった。コーヒーは日陰を必要とするため、ココヤシのプランテーションと平行しておこなうことが多い。また、かつては協同組合が養鶏場を経営し、かなりの成功をおさめていた。しかし、ダライラマがバイラクッペを訪問した際に養鶏場に目をとめ殺生を戒めたため養鶏部門はすぐに廃止され、飼われていた鶏は処分された。養鶏所の跡地には、現在、養老院が建っている。とはいえ、チベット人の食生活に肉は欠かせない。現在キャンプの人びとは、鶏肉や牛肉を町のインド人商人から購入している。

チベットからバイラクッペへの移住は、チベット人の生活習慣に変化をもたらした。まず、チベットとカルナータカでは気候も植生がちがう。そのため伝統的な食物や酒の材料も変えざるをえない。今、バイラクッペではラギや米で酒がつくられている。食生活上の大きな変化は、ツァンパに加えて米を食べるようになったことである。ただし天水に依存したコロニーの農地では米はできないため、人びとは米を町で購入している。例外はゴールデン・テンプルとよばれるキャンプで一番大きな僧院である。ここでは、キャンプに隣接した土地を購入し灌漑施設を設けて、米を生産している。また近年、チベット人の飲料の嗜好にも変化がみられる。バター茶の飲み過ぎは健康によくはないという医療知識が普及したこともあって、バター茶の消費量は大幅に減った。とくに若い人たちは、バター茶よりもインド紅茶やコーラを好む傾向にある。また、トイレや下水に関する衛生管理意識も変わってきたという。インドの暑い気候のおかげで、それまで入浴の習慣があまりなかったチベットの人びとも毎日、水浴びをするようになった。道にゴミを捨てることも減った。難民キャンプができた当初に比べると、最近のコロニーは格段に清潔になったといわれる。

インドのチベット難民は、居住するコロニーを越えてさまざまな人びとと結びつきをもっている。バイラクッペのチベット人の婚姻は多く見合い結婚で、キャンプ外婚的な傾向が強い。

そのため他のキャンプのチベット人とのネットワークは、婚姻関係を介したキンシップ・ネットワークによって裏打ちされていることになる。また海外に在住するチベット人とインドに残る親族との絆も緊密である。チベット正月には大都市やさらには海外から、多くのチベット人が出身地の難民キャンプに帰郷する。彼らは故郷の僧院やさまざまな施設へ多額の寄付をおこなうことによって、海外での成功を誇示し競いあう。また、バイラクッペにはチベット仏教の各セクトの僧院が点在している。そこにはチベットのみならず、ネパール、ブータン、モンゴルなどから僧侶が集まっている。毎年、台湾のチベット寺院から中国人信者の巡礼グループもやってくる。僧院はこうした国際的なネットワークの結び目である。こうしたネットワーク以外にも、人びとは「もの」を介してキャンプやコロニーを越えたさまざまな繋がりをもつ。その一つがハンディクラフトを介した関係である。

2. カーペットの生産

バイラクッペのチベット人が主食とするトウモロコシは、高原地方の温暖な気候のもとで天水に依存して栽培されている。トウモロコシの場合、植え付け、除草、収穫のそれぞれの時期に集約的に労働力を必要とするが、それ以外の時期にはあまり手がかからない。そこで女性たちはトウモロコシ栽培の合間にカーペットを織っている。キャンプの協同組合のカーペット生産部門は1970年に設立された。バイラクッペの協同組合にはカーペットのセクションが3つと、線香を製造するセクションが1つある。インドにあるチベット難民のカーペット工場では最も大規模な組織の一つである。協同組合が原料の羊毛と綿糸を一括購入し、製品をトレーダーへ販売している。協同組合のスタッフは8人で、マネージャー1名、3つのカーペット・セクションの会計士、そして線香セクションの会計士、他に3人の技術指導者からなる。技術指導者は3つのカーペット・セクションに一人づつ配属され、初心者トレーニングを担当し

ている。バイラクッペでは現在約100人あまりの織り工がカーペット生産に従事している。みな女性である。ほかに8人の裁断師がいる。裁断師は女性一人をのぞいてあとは男性である。ちなみにカーペット工場に併設されている線香工場では20人の男性職人が働き、カイラサ山ブランドの線香を製造している。

カーペットの織り方を学びたい人は、まず6ヶ月の研修をうける。その後、正式な職人として協同組合の仕事をするようになる。女性の多くは既婚で、子供をつれて工場にきている。子供たちは機のそばで遊んでいるが、それができる労働環境だということも女性たちがカーペットの生産に従事する理由のひとつである。カーペット部門の設立当初、織工は150人ほどいた。近年の織り工の減少は、カーペット以外のビジネス、たとえば衣料品の小売りなどを専門におこなう者が増えたためである。

バイラクッペの工場では100%ウールの60カウント糸を使用して、スクエア・インチ80ノットのカーペットを織っている。カーペットのサイズは、1×1フィートの座布団用とチベット人がベッド敷きにする3×6フィートの大きさが多いが、他にも6×8フィートなど、業者の注文に応じて大きなサイズのカーペットも製造している。3×6フィートのカーペットは一人の女性が織るが、大きなカーペットの場合、5、6人の織り工がならんで織る。デザインはチベットの伝統的な祭具をモチーフとした吉祥模様が多い。世界樹や動植物、幾何学模様もある。古典的な柄のほかに、注文に応じてデザイナーが描いたものを織る。多くは業者がデザインを指定してくる。織工たちは手書きのデザインを方眼紙に写したデザイン・ペーパーに基づいて織る。織り上がると会計士が寸法を確認し、デザイン、サイズ、ノット数、糸の重量などを用紙に記入する。

糸はチベット羊毛糸センター (Tibetan Wollen Yarn Centre: a Unit of H. H. the Dalai Lama's Charitable Trust, Daramsara) に発注して仕入れる。このトラストはハリアナ州のパニパット (Panipat) に工場をもち、ニュージーランドか

ら輸入した羊毛などを販売している。糸価格は、ウール・コットンの比率、カウント、色による。バイラクッペでは100%ニュージーランド・ウールのみを使っている。

バイラクッペのカーペット工場に発注しているバイヤーには、チベット人もインド人もいる。チベット政府が関与しているカーペット取扱店には、デリーとバンガロールにあるチベット工芸店（Charitast Tibetan Handicrafts）、デリーのチベット難民自助工芸店（Tibetan Refugee Self Help Handicrafts）がある。製造したカーペットは、チベット人の日常生活品、とくにベッド敷きとして消費されるほか、チベット人以外の人びとの床敷き用カーペットとして世界各地に送られる。一般にチベットのカーペットの主な輸出先はアメリカとドイツをはじめとするヨーロッパ諸国である。とはいえ、世界に流通するチベタン・カーペットの多くはネパールから輸出されている。バイラクッペの工場からの直接の輸出はない。バイラクッペの組合は、現在、輸出ライセンスを申請中である。人びとはあと3ヶ月から半年の内に輸出業にも参入できるのではないかと期待している。

バイラクッペのカーペット生産量と販売量は月によって違いがある。例えば2001年4月は、生産が91スクエア・メーター、販売は43スクエア・メーターであった。バイヤーは9月と1月に集中する傾向があるので、これらの月は販売が生産を上回る。とはいえ、1998-99年の年度生産高の総計は987.85スクエア・メーター、販売高は795.38スクエア・メーター、1999-2000年は生産高769.43スクエア・メーター、販売高617.12スクエア・メーター、2000-2001年は生産高604.81スクエア・メーター、販売は409.07スクエア・メーターと生産、販売ともに減少している。カーペットの生産はとくに4月から10月に集中し、ほかの月には減少する。トウモロコシの栽培は9月におわり、農閑期である9月から1月にかけて、多くの人びとがキャンプを離れ、インド各地にセーターを売りに行商にでかけてしまうからである。カーペットの生産量の増減は、このようなバイラクッペの人びとの生活サ

イクルを示している。彼らの一年は、トウトウモロコシの栽培とカーペット生産の季節、そしてセーターの行商の季節という二つの時期からなっているのである。

3. セーターの行商

インドの大きな町やウーティーのような高原の避暑地では、よくチベット人が道ばたに小屋掛けをしてニット製品、とくにセーターを売っているのを見かける。標高の高いチベット高原では、ヤクや羊の毛で編んだセーターが生活の必需品である。しかしインドでチベット人が売っているセーターは、そうしたチベットの伝統的なセーターではない。またチベット人たちが編んでいるわけでもない。チベット製の昔ながらのセーターは分厚くデザインも流行遅れで、インドではまったく売れないという。バイラクッペのチベット人は自分の子供たちのためにセーターを編むことはあっても、売るために編もうとは考えない。商売用のセーターはウッター・プラデーシュ州のルディアナ（Ludhiana）で仕入れている。セーターを編んでいるのはその地方のインド人である。チベット人はみなルディアナになじみのインド人商人をもつ。彼らとは長いつきあいなので卸値も安く、売り上げが悪いときなどかなり融通してくれるからである。あるとき一人のルディアナの商人がチベット人を中傷するようなことを言いふらしたという。チベット人たちは申し合わせて一年間彼との取引をいっさいしなかった。困り果てた商人はダライラマのところへ行って謝罪し、仲介を頼み、ようやくまたチベット人たちと取引ができるようになったという。この逸話はチベット人コミュニティの結束の強さを示すとともに、ルディアナの卸商人とチベット人との経済的な相互依存関係の強さを表しているといえよう。ルディアナでセーターやその他の衣服、靴、ショールなどを仕入れたチベット人たちはそこからインド各地に散らばる。それぞれが毎年たいてい同じ町へいき、同じ場所に露店を出すという。実際、トウモロコシ栽培では自家消費分以外に大した利益にはならない。

そのため3ヶ月のセーターの行商で手にする30,000から40,000ルピーの現金収入は大きく、それなしで生活を維持してゆくのはとても難しいのである。

こうした季節的な行商以外にも、セーターや衣料品などを商う人びとがいる。近くのクシャルナガルには毎週火曜日と金曜日に大きな市がたつ。野菜、肉、干し魚、家庭用品、衣料品など、あらゆるものがここで売られる。そこにチベット人の衣料品の露天も並ぶ。バイラクッペの中心の役場近くには、生活必需品や衣料品、靴などを売る商店がある。チベット人が扱う衣料品は、町の店よりも種類が豊富で価格も安いという。ジーンズやスニーカー、ジャンパーなども数多くそろっている。そのため近くの町からバイラクッペに服や靴を買いに来るインド人がたくさんいる。とくに祭りや正月のまえになると、衣料品をまとめ買いするために多くの人びとがコロニーにやってくる。また最近では僧院を訪れる観光客も増えている。そうした客をあてこんで2年前にショッピング・センターがつけられた。チベット・ハンディクラフト・センターや新しいホテルも建設された。チベットの人びとはセーターの行商の延長としてさまざまな種類の衣料品を仕入れることになったわけであるが、それがたくさんの仏教僧院が点在する聖地としての観光地バイラクッペにインド人を引きつけるもう一つの魅力となりつつあるようだ。

4. チベット服の縫製

バイラクッペのチベット人のうち、僧侶と多くの既婚女性は伝統的なチベットの服を着ている。若い人たちのあいだでは、インドのほかの地域とかわらずジーンズが流行っている。僧侶と尼僧はいずれも黄色のブラウスに麩脂の衣を身につける。チベットの女性服はジャンパースカートとブラウスの組み合わせであるが、既婚女性と未婚女性を区別するのはエプロンの有無である。既婚女性はジャンパースカートのうえに三枚はぎの横縞のエプロンをしている。

伝統的なチベット服は自分たちで縫ったり、

バイラクッペのテーラーで作ったりする。バイラクッペでもっとも有名なテーラーは、映画セブン・イヤーズ・イン・チベットの衣装をつくったンガワン・ロジュ (Ngawan Lodoe) 氏である。彼は1959年にチベットからダラムサラに逃れ、1970年にバイラクッペにやってきた。彼の工房には、いつも5、6人の職人が働いている。バイラクッペには小学校から高校までであるが、子供たちのなかには勉学に関心が無く学校をドロップ・アウトしてしまう者もいる。彼はそうした子供たちを引き取り、手に職をつけさせるために技術指導している。

この工房では注文に応じて何でも作るが、とくに多いのは僧侶の服や儀礼用の帽子、高位のラマの冠、タンカの表装、供物バックなど儀礼用品などである。供物バックは小さな肩掛けで、なかにバター、花、香粉などを入れる。祭壇に下げる壁飾りにはマントラが織り込まれている。またチベットの女性がかぶる美しい石を編み込んだ伝統的な髪飾りも作っている。儀礼用の壁掛けの縁飾りとして、さまざまな色の糸を結びつける作業もおこなう。タンカの表装の場合、注文主が絵を持ってきて依頼する。タンカとはチベットの神々や曼陀羅を描いた宗教画である。僧院はもちろんのこと、一般のチベット人家庭の祭壇にもタンカが掛けられている。注文のなかにはプラスチック・コーティングされた台湾製のプリント・タンカの表装もある。もとのタンカを描いたのは台湾にいる僧侶らしい。こうしたタンカの表装につかう生地は、鮮やかな色の花柄を織り込んだ絹織物である。チベットで表装につかわれていたのは中国人が作った布であった。今、インドで使われているのは、もっぱらベナレスで織られたプロケード（紋織り）である。デザインはチベットあるいは中国起源の伝統的な模様であるが、織り手はインドの職人である。この種のデザインの布を購入するのはもっぱらチベット人だという。ロジュ氏はさまざまな種類の生地を購入し、数種類の色の織物を組み合わせて表装する。その組み合わせ方こそが、彼の腕の見せ所である。

5. タンカ・ペインティング

バイラクツペのチベット人たちが、ダライラマに黄金のタンカを奉納したことがある。そのタンカを描いたのは、まだ若い評判の絵師ペンパ・チェリン (Penpa Tsering) 氏であった。彼はラサのパンチェンラマの僧院にいる有名な絵師ロブソン・プンチョクのもとで13年間タンカを学んだ。1997年にバイラクツペに来て、タシ・ルンポ僧院の工房でタンカを描くとともに若い人々を指導している。

チェリン氏はタンカの起源について、次のような物語を語ってくれた。昔々、インドの王と中国の王が贈り物の交換をしていた。ある時、中国の王からインドの王へ、たくさんの貴重な宝石が贈られてきた。インドの王はこれほどの贈り物にふさわしいお返しの贈り物を思いつかず、どうしたらよいか佛陀に訊ねた。佛陀はそれを聞くと、黙って湖に手を浸した。すると湖に大きな絵が現れた。佛陀はその絵を湖からとりだすと、これを受け取るために中国の王自らがここへ来るように伝えるよういった。それを聞いた中国の王は、なぜ自分がそれほど遠くに出かけて行かなくてはならないのかと不審に思った。それでも中国の王は遠路はるばるとやってきた。そして佛陀がとりだした絵をみると、そこには世界の全てが描かれていた。中国の王は驚き、そして佛陀の信者となった。チベットのタンカは、ブツァがこのとき湖に描いた絵なのである。

タンカを描く上でもっとも重要なのは計測だという。子供たちにタンカを教えるときには、黙ってまず自分たちの身体を徹底的に計測させる。そこから全てが始まる。インドにいるチベット人の絵師たちは、そんな面倒なことはしない。彼がそれほど計測にこだわるのは、タンカがただの絵ではないからである。タンカはまさに正確に、いっさい間違いがないように描かねばならない。もし少しでも間違いがあればよくないことが起こり、その災いは絵師にも降りかかる。タンカを描くためには、まず教典を十分に理解し、そこに書かれていることが自分の心の中でまざまざとイメージされるようになら

なくてはならない。それから一つづつ段階を踏みながら、神々を描く技術を身につけてゆく。インドの絵師たちは、タンカを教えるのにふつう弟子たちから月350ルピーほどの授業料をとる。しかし、彼は弟子からいっさいお金をとらない。自分がチベットでタンカを学んだとき、お金を払ったりはしなかったからだという。

タンカを描くには、最初に木枠をつくりそこに布を張る。次に白い粉を水に溶いて布を白く塗る。そこに墨で下絵をかく。習い始めは、布ではなく木版に墨で描いて練習する。この墨は、叩くとよい音がするようになるまで高温で焼いた特別のものである。墨の先を細く細く削って先を尖らせる。この墨で描くとき、少しでも力が入ると尖らせた先は崩れてしまう。こうした墨で描く練習しているうちに、自然に手がなめらかに動くようになる。墨のかわりに鉛筆で下絵を描いては、いつまでたってもスムーズに手が動くようにはならない。

下絵を描いた後、色を付けてゆく。チベットでは岩絵の具をつかっていたが、インドではそれはほとんど手に入らない。唯一手に入るのはチベット語でギャムツェチョクラという臘脂がかった赤い顔料だけである。この顔料は、チベットでは骨折の薬として知られている。彼の絵の特徴は、この赤い顔料をつかうことによる独特の色彩にある。彼はチベットの僧院で長年、たくさんの古いタンカを見てきたため、本物のタンカの色を知っている。インドに来てふつうの絵の具をつかうようになって、その色を思いだしながら絵の具を混ぜ合わせるので、他の絵師の描くタンカとは違った美しい色彩となる。多くの絵師が色づかいの秘訣を教えてほしいとやってくるが、それを言葉で伝えることはできない。

ひとつのタンカを描くには約一ヶ月かかる。しかしインドの依頼者たちは、一ヶ月分のお金を払いたがらず一週間で描けという。一ヶ月かけて丁寧に描いても、一週間でざっと描いても注文主が払う値段は同じである。そこで最近は一週間で完成させるようになった。そうしないと生活してゆけない。チェリン氏は、チベット

にいたころタンカを描くのにお金のことなど考えたことはなかったと嘆く。時間もお金も考えず、ただひたすらタンカを描いていたと、そのころを懐かしむ。しかし、インドではもはやそんなふうにはタンカを描くことはできない。この絵師の話をしきかぎり、一見のどこに見えるバイラクッペもインド化し、人びとの生活や価値観もチベットのそれとはずいぶんと違ってきているようである。

結び

人びとが日常生活に用いる物品は、原材料の製造から販売にいたる人びとネットワークのなかで物質として生産されるのみならず、祭具としての宗教的な価値、商品としての経済的な価値、オリエンタルな文化的価値といったさまざまな価値を帯びた「もの」として作り出されていく。人びとは「もの」によって結びつけられるとともに、そうした関係性のなかで「もの」に付与する社会的価値を作り出している。だからこそ、限られたフィールドワーク期間のなかで、ハンディクラフトという「もの」に焦点をあてるという方法をとることによって、バイラクッペのチベット人社会の諸側面を捉えることができたように思う。最後に、ハンディクラフトを切り口にすることで浮かび上がってきたカルナータカのチベット人社会の現状についてまとめて結びとしたい。

まず、ハンディクラフトの原材料の供給、製造、流通という生産・消費プロセスを追うことによって、以下の三点についての概況が得られた。

第一は、ハンディクラフトとの関わりから読みとることができるバイラクッペの人びとの生活サイクルである。それは農耕およびカーペット生産とセーターの行商の二期からなる。それはまた定住と移動、集住と分散居住のサイクルでもある。

第二はハンディクラフトの生産や流通、消費を通して形成されるキャンプを越えて広がるネットワークである。それはインド内外のチベット人コミュニティ間のネットワークのみ

ならず、チベット難民とインドの商人やインドの職人たちとの関係、そしてチベット仏教をおとした世界的な繋がりなど、多様で重層的なネットワークである。とくにルディアナのセーター卸商との相互依存関係、チベットの工芸品を消費するチベット人以外の人びととの結びつきは、チベット難民の経済的基盤をなしている。

第三はハンディクラフトの社会、文化的意味の変化に映し出されるチベット難民のインド定住化にともなう生活や価値観の変化である。バイラクッペのタンカ絵師が語ったのは、まさに祭具としてのタンカから商品としてのタンカへという「もの」の意味の揺らぎであった。インドにおけるチベット難民のあいだでのハンディクラフトの生産技術の伝承に注目するならば、そこにはチベット難民であるかぎりインドの市民権を得られず、限られた貸与地に居住を強いられる人びとが、次世代の子供たちに生計手段を与えんがための教育という経済的な意義のみならず、チベット人としての誇りをもつ人びとがハンディクラフトという「もの」に託す社会・文化的意味も見いだされよう。

現在、インドのみならず世界の各地にチベットのハンディクラフトを売るチベット難民の店がある。売り手のチベット人はチベット生まれであったり、あるいはインド、ときにはモンゴルの生まれであったりする。こうしたハンディクラフト店では、各地に散在するチベット人コミュニティにある生産地からいろいろな商品を仕入れている。例えばバンガロールのチベタン・ハンディクラフト・センターでは、バイラクッペやダラムサラで織られたカーペット、バイラクッペやパニパットで作られたお香、ネパールでつくられた手漉きの紙飾りや便せん類、ダラムサラで織られた多分織り手はインド人だと思われるチベット柄の手織の絹のクッション・カバーや絹のスカーフ、各地のコロニーの鍛冶屋がつくる銀や真鍮の置物、各地の僧院で描かれたタンカ、インドの印刷屋に発注してつくったセイブ・チベット・シールやチベット国旗シールなどのプリント類、チベット

やネパールから持ち込まれた古い銀の装飾品などが所狭しと並ぶ。ハンディクラフト・センターは、さまざまな産地からさまざまなハンディクラフトを仕入れるため、チベット人社会のネットワークの結節点すなわち情報交換の場となっている。ここを通してキャンプを行き来する難民たちの動き、チベット人パーティーの情報などが各地に伝わる。バンガロールのカレッジで学ぶチベット人学生の行動が、数日もたたないうちに逐一バイラックペにいる母親の耳にはいつてしまうといわれるほど、このチベタン・ネットワークは姦しい。

さて、そのハンディクラフト・センターで売られるタンカやカーペットの多くは、おもにチベット人以外の人びとによってアートとして購入されている。そこではカーペットの吉祥柄も「チベット」的エキゾチズムを喚起する意匠としてのみ消費される。しかし、そもそもハンディクラフトとして括られるカテゴリーそのものが、日常生活や宗教生活を支える日用品としての「もの」とその制作技術の伝承から、生計手段として販売する商品としての「もの」とその生産技術の伝承へという「もの」そのものの社会・文化的意味における比重の移行を背景に成立している。ハンディクラフト・センターという場において、日用品としてのカーペットが

美術品へ、供物バックや祭壇の壁飾りといった儀礼用品が民芸品へ、祭具としてのタンカがアートへと転じる。そのなかで、それらは商品としてチベット難民たちの生計を支える「もの」となるとともに、それ自体が、チベットという故地からはるか彼方に暮らす難民たちのネットワークをつなぎ、故地を離れて久しく、インド生まれの世代も増えつつあるかれらのエスニック・アイデンティティーを支えるような文化的な意味を担う「もの」となっている。

こうした現状において、ハンディクラフトの「チベット」的エキゾチズムをもっとも必要としているのは、今や世界に広がるチベット難民たち自身なのかもしれない。

文献

Appadurai, A. (ed.)

1986 *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*. Cambridge: Cambridge University Press.

Mukerji, A.B.

1983 "Dispersal and Resettling of Refugees in Independent India: a Cultural-Ecological Model", *The Indian Geographical Journal*, Vol.58-1, pp.1-28.

Singh, M.

2000 *Handcrafted Indian Textiles: Tradition and Beyond*. New Delhi: Lustre Press.